

沼尻維一郎編輯
西南太平記

七号

下

30

25

20

15

10

A 434
12

西南太平記七編卷之下

東京 沼尻絰一郎編輯

第十四回

桐野利秋射的の為に落馬

并吉岡兵七義よりつて屠腹せ

九州地方國事犯決刑の儀に佐賀征討の例ふよ
り総督宮よ其の處刑の儀を仰せ付られ河野元
老院幹事の同宮の指揮を受け處分小畑判事
の河野元老の幹事へ協議のうへ同の指揮

西南太平記

七編下

48-7795

受け事務取扱べきことと達せらるる野小畑の
 両氏に至急九州に出張し又四月四日の内務権
 大書記官木梨精一郎の急御用ふく大坂へ出
 発し香川一等判事補の同五日は長崎裁判所
 へ出立され舊中津藩知事奥平昌邁公の近々
 旧藩地へ赴り又四月一日より益々官軍進ん
 だ三嶽よりあり賊壘を攻撃し翌二日前面の賊壘
 と陥れ猶三日早天より大拳し向坂の賊壘一ヶ所

と陥りたれど如何の策ふやありけん一ト先此所と
 引揚げたるよその夜木留の賊へ官軍の営を夜討
 る一たれを之を邀撃し官軍少も屈まら色も勇
 進猛烈なるよぞ流石の賊兵も撃ち立ちきて放
 走するが官軍へ勝つ乗トく進撃し賊軍の焚
 出塲と放火し木留村過半の来り取りたり此日
 熊本の方まで頻り砲声聞へたりと云植木
 へ全く戦ひく翌四日の官軍垂水村の臺塲よ

りへタミ村に居る城と砲撃し同所を放火し
 きむ民家の忽ち焼失す同日も植木の休戦と
 り茲に過日兩軍入り乱れ戦ふ最中賊將相野利
 秋の野津少將の兵士と指揮する體を視し汗
 馬を鞭打ち群る官軍の中へ進撃し渦巻く官
 兵奮戦あり野津少將の相野と見掛るを必
 死と極め勇進猛烈なるよぞ相野利秋の近
 きまむ野津少將の肩先へ斬付し程は折し

も彼の射的をりり高名なる村田経芳も出逢
 たる者は幸ひと右の次第と話さし一は村田経
 芳へ奮然として大に怒り憎き賊徒の拳動か
 る目も物見せんと馬を飛して一目散に逐ひ行
 此方より小高きところの丘に馳上り彼方と
 見渡せむ果して四五丁先ふ野津少將の一時
 場を引返さむ跡に相野の必死を極め拳も乗
 トと馳入らむとむりに見えしを倭の英新

製の射的銃とりりて遙み之れを狙撃せらる
一とあやまらば砲声と共に桐野の馬より真逆
様ふ落たりしとの事ありが未どその死生を知
らざりしとも云ふ

傳云桐野利秋の鹿兒島近郷の農夫中村
氏の二男よりて舊名を半次郎と呼び少年
の時よりて撃剣を好ししが敢て師ふ就
て学びしよもあらず山野を跋渉し竹木を

研ぐ腕力を試み心飽まで別なまをバ遂に
戊辰の役奥羽越の戦に從ひ軍監となりて
有名あり撃剣家を討向ふところ敵なく
戦功屢々ありしが後桐野の姓を名乗り
身陸軍の頭職ふ備はりし由一度方向を誤
つて賊隊の首將となり既山鹿口より有て
去るを官兵と抗戦せしと
亦説云野が去る三月十二日と西軍大進撃

桐野射的
銃の為
落馬する



とるあり三浦少将岩村小陣營と布也第三
 旅團の大兵を率ゐる先平山口より攻撃し
 賊の陣をば乗つ取られしと桐野の再とび
 かへ合せし烈撃戦ふ銳氣と避け一先
 其所と引退ぞき新手を加へて盛返せば初
 度の勝利と誇りたる桐野がむかへ戦ひが
 新手の兵が前敗とまがんとする憤勇に
 四途路よありと敗走し銃器弾薬又味方

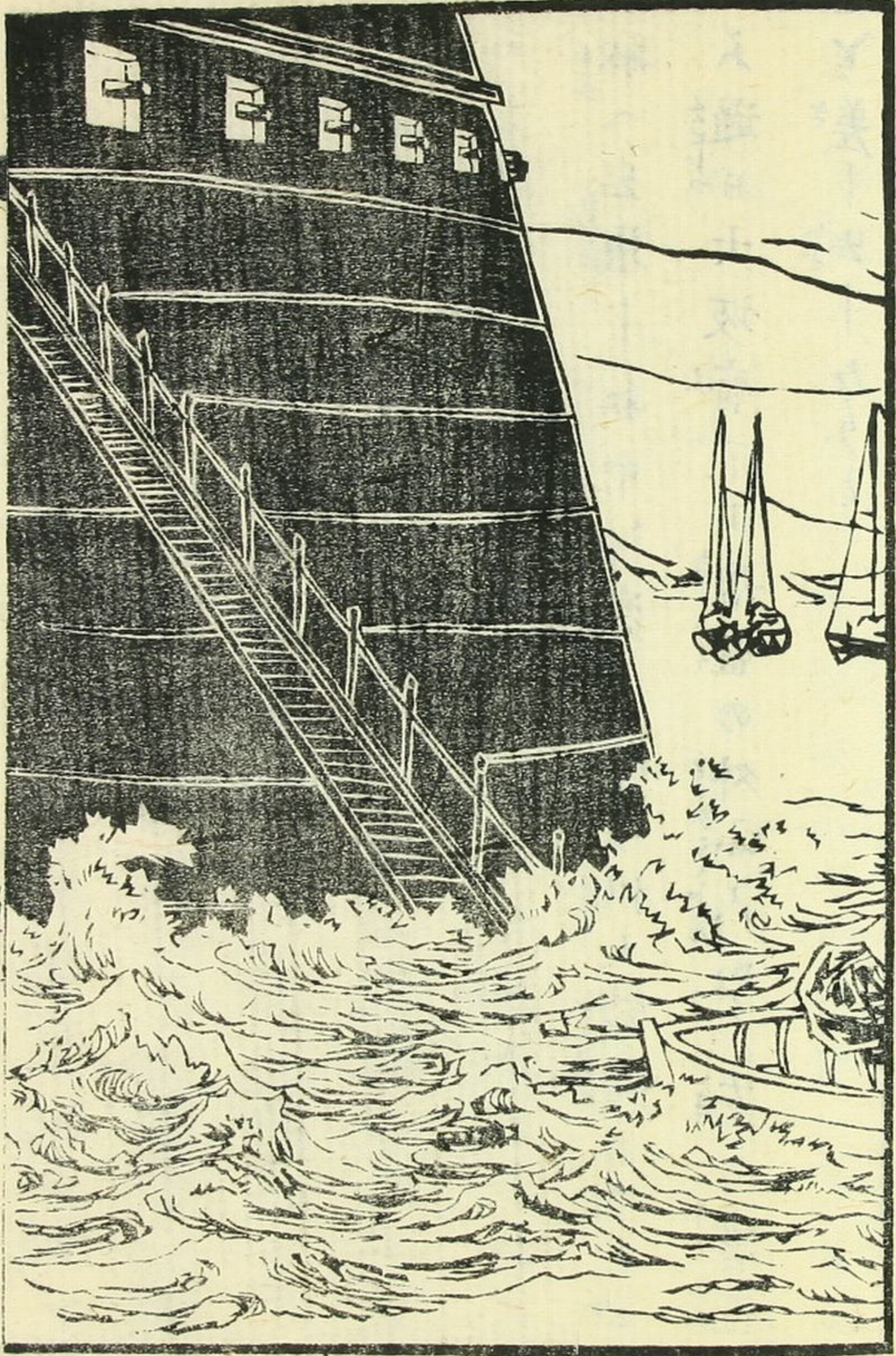
の死骸まで打捨く右往左往と乱きたつと
 官軍輒く此の地の砲撃を二十三ヶ所乗つ
 取まバ工兵のあまを毀ちまうし進んで鍋
 田を焼く賊将桐野を味方の敗軍は勇氣
 大に衰ろへけん危急と西郷の陣所を通ト
 頼りふ應援と乞ひけるよ西郷大将の云く抑
 此の度の一戦は薩一国の兵を以て日本全
 州と敵とまらるの戦ひるを苦戦は今更よ

言を待またず千騎せんきが一騎いちきよりあるまでも唯ただ憤戦ふんせんして
 て止やむべきとありしめんや然しかるは何なにぞ援兵えんへいを
 どを乞こひ来きるとも決かして送おくることを得えずと
 使つかひの者に答こたへとり桐野きりのの後の戦せん争そうは必かな死し
 の勇ゆうをあらしめて其上そのかみに屍しかばねを曝さらさんおと
 必かなず速すみき疑うたがひなきるべしといふ
 未など桐野きりのの死し生せい確かくらざむと殊ことの外ほか派は手の疵きず
 と知しるべし又また大山おほやま少将せうしやうは先日せんじつ田原坂たはらざかの戦せんひの時とき

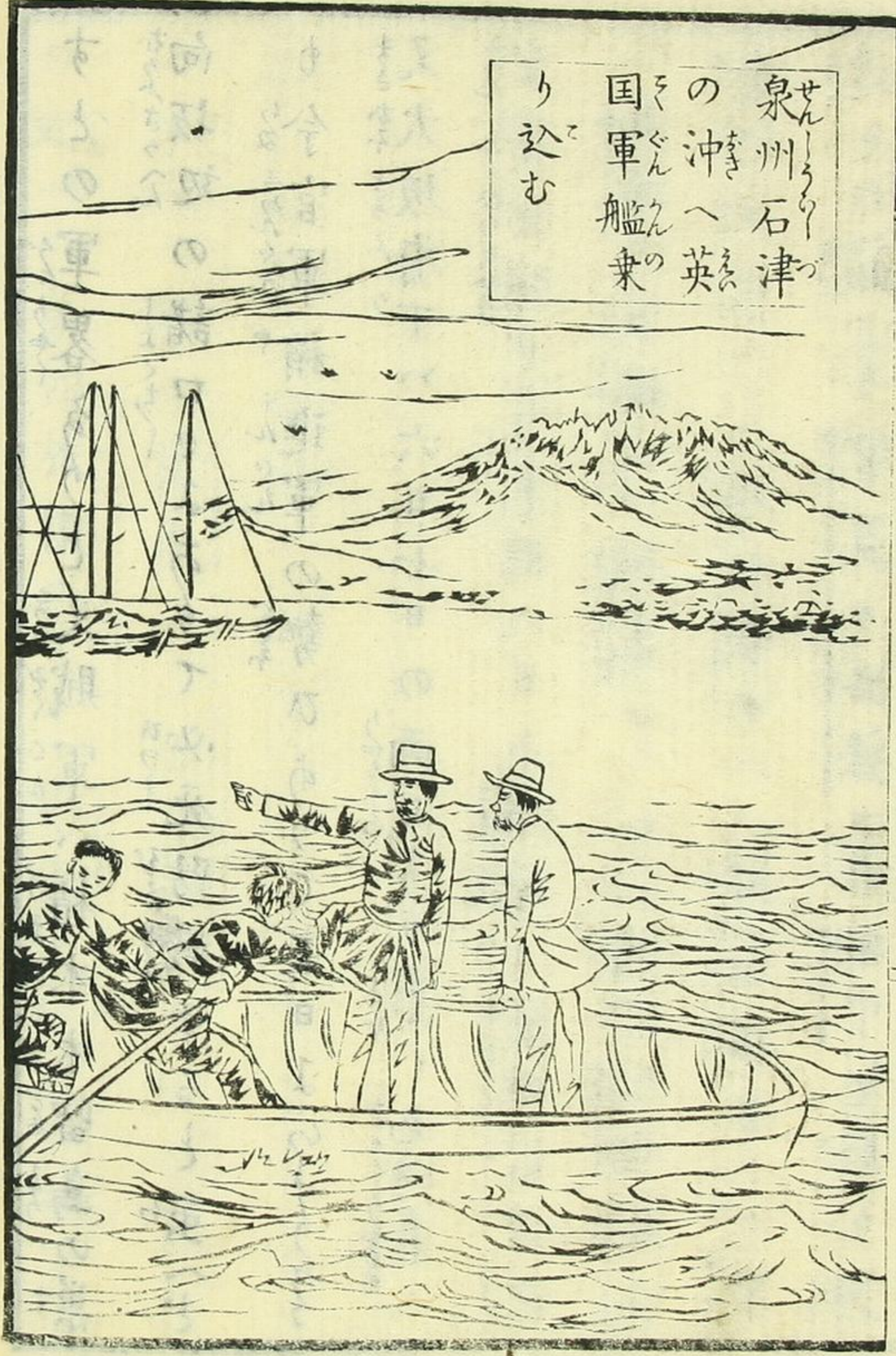
小自せうじり戦地せんちを奔走ほんそうさし折柄せうがら路傍ろぼうに茂さかりた
 る小籠せうろうの内うちより賊兵ぞくへい二人ふたり大太刀おほたがと振ふりかざし
 跳はり出でるよと見えひが忽たちまち大山おほやま少将せうしやうと目掛めかけ
 て切きてあらしむぞ少将せうしやうの後のちより従したがひ一騎兵せんきへいへ夫おの
 とりんるより無禮ぶらいをるると短槍たんそうを振ふるて之これと戦たたか
 ひ僅わずかく二三合ふたさんごうに至いたらざらば賊徒ぞくとをその場ばへ
 突つ殺ころしたりしに實じつに危あやきことありや曾さて
 く絨将じゆうしやう桐野きりのが帯おびせる「井い」へル祖そ先ぜんより傳つたわり

一ところの正宗の名劍みて尋常の刀より一重
ね厚く諸手ふての容易く打振りがとま程に
て惣銀作りの拵へは鍔へ純金ありと此装飾
ハ金千五百田と費やせし物よく陸軍よて誰
知らざる者るるべしと當時木留口の官軍ハ
第二旅團ハ野津三好大山の三少将あり山鹿口
の方へハ第三旅團ハ三浦少将あり伊倉高瀬
の辺へハ第四旅團ありし植木木留の声援とる

すとの軍畧ありと又賊軍ハ植木木留鳥の巢
向坂辺の諸口々ありて必死防戦すると虽へど
も今官軍稍進軍の勢ひありて五日よりりたる
又大坂府下ハ六日七日の両日より悉く九州表へ
官員出張せらるる同八日ハ堺縣下泉州石津沖
へ英國の軍艦ガ一艘着せしハ賊徒外国船よ
来て来りしと堺の市中ハ一時動揺せしが早
速その筋より官員ガ出張され船中と取り調



せんしゅうのせん
 泉州石津の沖へ英艦の乗
 り込む



らまゝ一ととろ大砲四門小銃千挺弾薬數百発と
 積込込とあまを其趣と速と大坂の内務省出張
 所へお届とあり陸軍参謀部へも夫々通報とあり
 参謀部より譯者一人神戸在留の英国領事代理
 のとの同港税関お雇の外お人も同道とておの
 船へ出張一船中と悉く改め何れ談判ありと云
 ふ過日大坂府下と居留の外お人も左の書面
 と差し出したりと

目今大坂軍事病院お於てハ外科の医員お
 乏しく依て負傷兵士の治療も充分待行届
 又難相成云々及傳聞候人命と救ひ患苦と
 助る等の善業お盡力と候候儀ハ実と小
 子とあいらとも本懐の至り候條希はくハ
 今回罷出冥加の為めと聊々奉輔佐度此
 儀而已とらざる同様の事件と付相應の御
 用も有之節ハ何時成共罷出從事仕り度

候謹言

千八百七十七年

大坂居留地十三番

三月二十三日

工工一チアタムス

大坂府知事渡邊昇閣下

借も東京麻布谷町小住居せし柴阿健といふ
女ハ國事ニ尽カシテ有志壯年の女と二十五
人募り戦地へ出張し怪我人の看病とあり
たくりとあぐみ出どたり今度の事件につき

鹿兒島縣の官員十五人熊本へ向けし出帆せ

しが日向を経て薩州へゆきしとあり又と鹿兒

島縣士族波谷国安茨城縣士族栗原逸との外

二十六人ゆきも手錠にて警部巡查が護衛し

て東京へ送られたりとりその以前鹿兒島藩の

ころの門閥家の一人と言れて島津内記の家

来にて吉岡宗吉と喚ぶるの文学は長しりの

ありは是より二個の男子ありし兄兵七の親の

跡と嗣ぎ弟宗次郎ハすとふる世才あるものゆゑ
 久しく東京へ出く居り這の回暴動の發る際に
 如何なる用みや国元へ歸り兄の許み逗留せ
 しよりらも幾日もたざり又賊將邊見十郎
 太が来つと弟宗次郎又逢ひたりと言へど折
 から他行せし趣き致兵七が答へしを聞ゆ終
 らず膝突き寄せ然らむ和主と問ふべきが舍
 弟ハ何等の訳あつと俄に歸縣せられしや定

めと仔細を知りてぞあらん具と稟し聞られよ
 と急迫しく問ひきて面と正し渠ハ久しく他邦
 ふありと家族の安否も問ざる由を歸省せし
 と言へるのそ外又仔細のあるや否や拙者の曾
 て知らずと言ふと十郎太ハ押し返して和主
 が實に知らずとるを今更改めて言ひ聞せ
 ん舍弟をすで又東京よあいに然る人の内命
 を受けまの地の内情を探索の為め偽り歸縣



あざぶ さいち
 麻布谷町の
 婦人等官兵
 の病院へ至
 らんとす

るせーは相違るゝより、舎弟は面會のうへ
 尋問なさんと思ひ、他行とあまは術まき
 也。今夕六時、再び来らん。夫まで、舎弟が歸
 らを、此度自宅、み止置らまよ。万一その時、異變
 あらば、和主も無事、よの差、一箇がこゝに能う、
 と期を押し、て邊見が別を、行と跡へ程、
 弟がたち戻つて、遠の世才、又遅まり、きぬ疾
 くも邊見が留守へ来て、兄は迫つて、様子を察し

宅へ歸へると、そのまゝ、兄うんぎ、をと言ひす
 云と、かすこと、延けり、すを、ヤレ、待て、弟と声
 かけ、跡とあつか、かけ、ん、ま、ども、最早、行か、を、知
 れず、如何いせん、と、苦慮せ、一が、固より、正路、寶直
 ならず、武士、固氣の、兵七、也、弟と、宅に、止置らん
 と、堅く、邊見と、約せ、一と、今、さ、さ、取り、逃がせ
 一と、渠、二面、ハ會、さ、ま、ず、死、を、め、謝、する
 の、外、な、一と、す、で、覺悟、を、ま、い、め、一、か、う、い、夫

等の音と詳細と一通の書面と認めつ短刀
まろりと抜き放るゝたるを右手と取りつゝ
座を占めゝ邊見の來たるをもち受けたる所
よをや六時の時計の響音くや否るや案内も
るく十郎太が一室の裡へ踏を込と來ると兵
七の見るよりをやく辞をゆかけず彼の認めお
き一通とゆつゝ渠れが目先へ差し附ける
がら腹一文字と引き廻り腕掻切つゝ息絶

えたるより然らむ十郎太の形状と仰天
一打ち抜ろきつゝも兵七が差し出たる所の
書面と採り上げ開きつゝるゝ深くその所置を感
トウ頻る此の次第と西郷と報知れを彼の人
も其の死を惜しと則ち葬式料として金五
十圓と贈くりとぞ
是れと引返へ弟の辛く虎口と免りきて山間
と分け入りつ或ひは谷間と越え未だ賊徒等



吉岡兵七
 義みよつて
 屠腹する



ひよ困却るゝたまども暫時の之と戦ひ
逐ひつ追われつ必死の激戦あり一々志双方の
日を相引きといふありぬ

又過る三日大坂より一々戦地へ廻さま一諸品を
梅干二百樽疵傷人着用のコタンゼンドテラ七千
枚刀劍三千本毛布五萬まいコ工ンヒール銃弾
薬五百箱并ニ患者ニ関する諸器械等も至
るあり

又同日守岡侍従と慰問の勅使として高瀬へ
差遣いさせたり今般有栖川総督宮への勅語
竝み参軍等への御沙汰書の畧をの如し

征討総督宮への勅語

卿征討総督ノ任ヲ以テ陸海軍ヲ指
揮シ畫策進討其職ヲ盡シ朕其勞ヲ
慰シ賜フニ酒饌ヲ以テス尚黽勉將士
ヲ率申勅シ速ニ平定ノ功ヲ奏セ

ヨ

征討參軍山縣有明同河村純義黒田
清隆へノ御沙汰書

鹿兒島縣逆徒益光暴ヲ逞フシ官軍ニ

抗敵シ候處能ク總督官ヲ輔ケテ諸

軍ヲ指揮シ畫策進討勵精盡力候段

達ニ 敵聞深ク苦勞ニ被患召候依テ

為慰勞酒肴下賜候猶此上奮勵將士

ヲ率井勵マシ速ニ平定ノ功ヲ可奏旨御

沙汰候事

但シ各隊士官兵隊等へモ御慰勞ノ旨

可相達事

陸軍少將大山巖野津鎮雄三好重臣

三浦梧樓山田顯義川路利良へノ御沙汰

書

鹿兒島縣逆徒益光暴ヲ逞フシ官軍ニ

抗敵シ候所進討力戦能ク賊銳ヲ挫キ候
 段達 敵聞深ク苦勞ニ被思召候依テ為
 慰勞酒肴下賜候猶此上奮勉兵士ヲ率平
 勵シ速ニ平定ノ功ヲ可奏旨御沙汰候事
 総督宮へ金百四 山縣河村黒田參軍へ金五
 十田三好野津三浦大山川路少将へ金二十五田
 右の外士官以下兵卒巡查へも酒肴と賜り熊本
 鎮臺司令長官谷少将へも御沙汰書並酒肴

料を賜りたれど未ど達するを能はざるべし最
 早賊軍追撃させ退兵させしとき
 是より御船大激戦官軍熊本入城續て島
 津兄弟行在所へ参内ありつる訣ハ第八
 編み記載せるあり

西南太平記七編卷之下終

西南太平記

七編下

二一

明治十年五月一日 御届
同 十年五月十五日 出板

東京堀江町二丁目二番地

安達平七止宿

茨城縣平民

沼尻絰一郎

編輯兼
出版人

定價廿二錢五厘

萬笈閣製本各地專賣書籍館

江島 喜兵衛

水野慶次郎	柳川梅次郎	牧野吉兵衛	中村佐助	村上勘兵衛	丸家善七	小林新兵衛	山中兵衛	稻田佐兵衛	北畠茂兵衛
山中北郎	山中孝之助	鈴木忠藏	青山清吉	朝倉久兵衛	北澤伊八	太田金右衛門	荒川藤兵衛	石川治兵衛	林萬次郎

東 京

東 京

同	同	同	同	駿	同	同	同	同	同	同	同	遠	
	沼		靜	河	掛	二	見					江	
	津		岡	藤	川	俣	附					濱	
				枝								松	
小	吉	廣	佐	淺	大	天	古	白	一	山	齊	松	落
松	成	瀨	藤	井	塚	井	澤	木		下	藤	塚	合
浦	壽	市	俊	安	好	金	良	健	貫	仁	太	聚	清
	三			兵	五			二		兵	兵		
吉	郎	藏	平	衛	郎	藏	作	郎	社	衛	衛	人	七
周	同	同	同	越	同	同	同	同	同	越	同	同	同
防	四			後						中			
山	谷	葛		長	高					富			山
口	濱	塚		岡	岡					山			形
阿	佐	弦	松	中	車	川	大	中	守	土	中	平	市
部	藤	卷	田	村		上	橋	川	川	井	川	田	村
準	友	七	周	作	平		甚	甚	吉	宇	久	彌	五
		十			次				兵	三		平	郎
輔	吉	郎	平	平	郎	章	吾	藏	衛	郎	助	治	衛

010190507691

